

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320035

研究課題名(和文) アジアにおける近現代演劇の国際的比較共同研究

研究課題名(英文) International Comparative Research on Asian Modern and Contemporary Theatres

研究代表者

永田 靖(Nagata, Yasushi)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：80269969

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,700,000円、(間接経費) 4,110,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本をはじめとして、韓国、台湾、中国、インド、シンガポール、マレーシア、アメリカ合衆国、英国などのアジア演劇研究者との交流を構築し、共同比較研究を推進するものである。4年間の研究期間において、毎年2回の研究会を海外で開催した。アジア演劇における翻訳、トランスアジア、女性、近代化の問題が様々に議論された。日本の近代化の影響が主として東アジア諸国には植民地主義の基に影響を与えているものの、現代においては間アジアの演劇接触においてこれらの問題を乗り越えようとしていること、また伝統演劇の保存や再発見が行われ現代化して、独立国家としてのアイデンティティの源泉にしていることの実相を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research project group has organized by many asian members, such as Korea, Taiwan, China, India, Singapore, Malaysia, USA and UK. The research project has constructed the research network with these researchers and has held research meeting twice a year. During this continuous research meetings we have discussed the various issues of Asian Theatre; Translation, Inter Asian-ness, Women issue and Modernization. In especially we have discussed on Modernization of Asian Theatres and have made clear some points. Japanese modernization of theatre affected to east Asian theatres' modernization under Japanese colonialism. However, contemporary theatrical interactions within these Asian countries have tried not only to disclose the past but overcome this issue. And also we have discussed how traditional theatres have been re-discovered and tried to preserve them, and eventually being racial and cultural cite of identity of these independent countries.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術諸学

キーワード：近現代演劇 アジア演劇 ポストコロニアル 伝統と現代 インターアジア インターカルチャー

1. 研究開始当初の背景

現代のグローバル化の進行する中で演劇史・演劇学の在り方を再考することは急務の課題である。従来は西欧演劇中心の概念や演劇史観で研究されて来たが、20世紀のアジア演劇が西欧演劇に与えた根源的な影響はまだ正確に反映されているとは言い難い。またポスト植民地主義的なアジア諸国の自立を背景にした、自国演劇の再検討の機運の高まりは演劇学全般への大きな反省を呼び覚ましている。このような研究は個々の個人的研究にのみ依存するのではなく、アジアの研究者のネットワークの構築を進めながら行う比較共同研究がより効果的である。個々の研究は優れた成果を上げ始めているアジアの研究者間の、世界演劇史的視野に立った比較共同研究によって近現代演劇のアジア的特徴と芸術的特質を明確にするのが目的である。

本研究は昨年度創設された国際的な研究グループ Asian Theatre Working Group の共同研究と連携して進めるものである。これは演劇研究の国際的学会である International Federation for Theatre Studies (IFTR、国際演劇学会)の傘下で結成されたワーキング・グループで、本研究代表者永田靖がその代表を務めている。アジアの演劇を研究する時に、西欧演劇との比較対照ばかりではなく、アジア域内での演劇間の関係や接触も検討する共同研究である。現在、世界15カ国ほどから50名前後の研究者がメンバーとなっている。2008年7月にソウル(中央大学校)において予備的な会合を持ち、2009年7月にリスボン(リスボン大学)において第1回目の研究会をアジア演劇における「トレーニング」と「翻訳」をテーマに2日間に渡って開催した。この研究会の実績を踏まえて、2010年3月にはクアラルンプール(クアラルンプール大学)で会合を開催予定にしている。さらに、研究代表者永田靖が主宰している近現代演劇研究会とも連携して進める。近現代演劇研究会は、日本演劇学会の分科会として、10年以上の歴史を持つ研究会で、1年間に5回の研究会を行っている。主として大阪大学を会場に関西圏の演劇研究者の研究成果を報告しているが、近年ではアジアの諸都市での研究集会を開催して、訪問都市の演劇研究者と交流し問題意識の共有と議論の展開を行ってきた。上海集会、2005年2月23日～26日、上海戲劇学院。ソウル集会、2006年3月3日～6日、韓国藝術総合学校演劇院。沖縄集会、2007年3月9日～11日、沖縄県立芸術大学。これらの研究会は今後も継続して行う予定であり、アジアや欧米の研究者が多数参加して比較共同研究することでアジア演劇の芸術的文化的特質の解明に寄与するものと考えられる。

2. 研究の目的

現代のグローバル化の進行する中で

演劇史・演劇学の在り方を再考することは急務の課題である。従来は西欧演劇中心の概念や演劇史観で研究されて来たが、20世紀のアジア演劇が西欧演劇に与えた根源的な影響はまだ正確に反映されているとは言い難い。またポスト植民地主義的なアジア諸国の自立を背景にした、自国演劇の再検討の機運の高まりは演劇学全般への大きな反省を呼び覚ましている。このような研究は個々の個人的研究にのみ依存するのではなく、アジアの研究者のネットワークの構築を進めながら行う比較共同研究がより効果的である。個々の研究は優れた成果を上げ始めているアジアの研究者間の、世界演劇史的視野に立った比較共同研究によって近現代演劇のアジア的特徴と芸術的特質を明確にするのが目的である。本研究では、第1にアジア演劇間での影響関係を明らかにする。アジアの近現代演劇は西欧演劇の影響を被っているために西欧演劇との対照によって研究がなされてきた。アジアの各国の演劇研究者もそれぞれに西欧との関係で研究してきたために、相互のアジア諸国内での関係はほとんど研究されていない。他方で近現代の演劇実践はアジア域内での相互交流によって積極的に進められた経緯がある。具体的には、日本と韓国、中国、台湾、マレーシア、シンガポールの近現代演劇の影響関係を、上演、ドラマツルギー、演出理念、演劇政策について検討を加え、アジア域内での演劇的相互関係の多様性と不即不離の関係を明らかにする。第2には、アジア演劇の歴史や様式についての概念的な整理を行うことである。アジア演劇史は西欧演劇史研究とは異なる背景を持ち記述のされ方も異なる。演劇についての概念の多くも西欧演劇のそれらとは基本的に異なる。本研究ではアジア演劇特有の概念(美的性質、制作実施理念、訓練方法、社会的機能、批評言語など)について西欧の演劇概念と比較対照してその独自性を明らかにし、西欧演劇中心の演劇学・演劇史学を相対化し、アジアの演劇概念の共有化を目指す。

3. 研究の方法

本研究では、アジアの近現代演劇相互の影響関係の研究、アジア演劇特有の概念(美学、訓練方法、社会的機能、批評言語)の検討を行う。そのため研究活動は次の5つの柱を持つ。先行研究の整理と問題点の明確化

個別のアジア演劇研究を基にした定例研究会の開催 国際研究集会・シンポジウムの開催とアジアの演劇研究者のネットワークの構築 市民・学生に向けたワークショップの開催 『アジア演劇史概要』『アジア演劇論集』の編集・刊行

これらの方針に基づき、Theatre Journal 57.3 2005, Modern Drama 48.2 2005, Contemporary Theatre Review 16.1. 2006 などの雑誌論文をもとに西欧演劇研究におけるアジア演劇の位置や議論の方法を検討す

る。研究分担者を中心にそれぞれ分担した領域での先行研究の洗い直しを行い、定例研究会で議論して、問題点の把握に努める。アジアの側からの演劇史記述の方法論を検討する。また James Brandon(ed.), The Cambridge Guide to Asian Theatre, Cambridge UP, 1993, Don Rubin(ed.), The World Encyclopedia of Contemporary Theatre, Vol.5, Routledge, 1998 などを基に現在の英語圏におけるアジア演劇記述とアジア各国内の演劇研究の現状を相互に参照してその差異や問題点を浮き彫りにする。

また、日本演劇学会分科会近現代演劇研究会と適宜連携し、主として大阪大学で開催し、適宜、アジア各国より研究者を招聘して研究報告と議論を行う。またアジアや西欧の演劇研究機関に調査を行い、資料収集や研究動向の把握、また海外研究者と研究打ち合わせを行いネットワークの構築に努める。また国際演劇学会傘下の研究会組織 Asian Theatre Working Group の研究集会を組織して共同研究を行う。学生対象のアジア演劇についてのワークショップを開催し、学生レベルでの研究交流も行う。

4. 研究成果

2010 年度から 2013 年度の 4 年間で毎年 2 回の国際研究集会を開催した。2010 年 7 月ミュンヘン大学、2011 年 2 月大阪大学、2012 年 1 月台北芸術大学、2012 年 7 月サンチアゴ大学(チリ)、2013 年 3 月中央戯劇学院(北京)、2013 年 7 月バルセロナ演劇大学、2014 年 3 月大阪大学において、それぞれのテーマで研究集会を開催した。参加者は、日本、韓国、中国、台湾、シンガポール、マレーシア、インド、などアジア諸国からはもちろん、米国、英国、フィンランド、ポーランド、フランスなど世界各国からの参加者があり、それぞれに実りの多い会議を行うことができた。2010 年 7 月のミュンヘン大学では「演劇におけるインターアジア性」をテーマに 10 本以上の論文が発表された。ここではアジアの近現代演劇が国境を越えて互いの文化を吸収しながら形成されることの実相が紹介され、それぞれの問題性が指摘された。また 2011 年 2 月の大阪大学では、台湾 2 名、香港 1 名、マレーシア 1 名の 4 名のアジアの研究者を招聘して国際研究集会を開催した。伝統の現代化というテーマで、各国の伝統演劇がいかにして現代に再生され、現代化されているかについて具体的な報告と分析を行った。報告のあった 4 カ国はそれぞれ近代化の過程も異なっており、それぞれの伝統の持つ意味合いも独自のものがあり、アジア演劇としての特質を安易に纏めることの危険性を認識するとともに、同時に伝統演劇の現代化という点においては、ヨーロッパには見られないアジア演劇に共通する課題であるとの認識を得た。このテーマは、2011 年 8 月に大阪大学において開催された国際演劇学会大阪大会

「伝統、革新、共同体」に繋がるものである。この大会は世界の演劇研究者 300 名以上が集まる国際的な学会であり、日本での最初の開催となる。この科研グループの代表者永田が開催の実行委員長となり、主としてこの科研グループが実質的な中心となって開催した。2012 年 1 月には台湾国立台北芸術大学において研究集会を開催した。ここでも日本、台湾、米国、中国、マレーシアの研究者 10 名が研究発表をおこない、活発な議論を展開した。ここでは「アジア演劇の近代化」を主たるテーマに、それぞれの国の演劇の近代化がいかに進み、どのような問題点があったのか検討を行った。様々な具体的な内容を踏まえ議論した結果、劇場や運営形態は近代化されていくものの、劇の形式と内容は必ずしも近代化するわけではなく、それぞれの地域の固有の文化による修正が行われおり、固有の有り様そのものが近代を示すのであることが確認された。このテーマは、2012 年チリのサンチアゴでの研究集会に持ち越され、ここでも 10 本程度の研究発表が行われたが、まずは優先して研究すべきテーマであると認識されて、科研終了後にはこのテーマによる論文集を刊行することとした。2013 年 3 月の北京、2013 年 7 月のバルセロナでの研究集会を経て、2014 年 3 月に大阪大学において 19 名を招聘して開催した研究集会で論文集を前提とした研究発表を行い、アジア演劇における近代化の諸問題を徹底的に検討することとなった。

また 2011 年 5 月には台北芸術大学において、日本の大学院生 5 名の英語による研究発表を行ない、学生レベルでの研究交流の端緒とした。これは 2013 年 11 月に国立韓国芸術総合学校演劇院の大学院生 4 名と同教授 2 名を大阪大学に招聘し、「アジア演劇の新しい風景」と題する国際学会を開催した。これは本年度 2014 年度にも継続する予定となり、同数の大学院生を韓国芸術総合学校に派遣し、また国立台北芸術大学からも同数の大学院生の派遣を行い、三か国の大学院生レベルの研究交流に発展させる予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10 件)

市川明、「ブレヒトの『ガリレイの生涯』—三つの稿について」『大阪大学文学研究科 紀要』大阪大学文学研究科、54 号、査読有、73-116

瀬戸宏、「上海戯劇協社『ヴェニス商人』上演をめぐる」『演劇学論集』日本演劇学会紀要、57 号、2014、査読有、21-37

Yasushi Nagata, "Returning to Asia: An Overview from a Japanese Perspective,"

Forum of Theatre and Drama, National University of Arts, Theatre School, 2013, 査読有、pp.212-221

Mitsuya Mori, "Problematic Aspects in the Early Stage of Theatre Modernization in Japan," *Drama*, The Journal of the Central Academy of Drama, Central Academy of Drama, Beijing, China, 2013, Vol.149, 査読有、pp.17-27

瀬戸宏、「国立劇専『ハムレット』上演をめぐって」『未名』中文研究会、2013、31号、査読有、pp.37-54,

Yasushi Nagata, "The Japanization of Chekhov: Contemporary Japanese Adaptations of Three Sisters," *Adapting Chekhov: The Text and its Mutations*, (eds.) Douglas Clayton and Yana Meerzon, Routledge, 査読有、2012, pp.289-300

市川明、「ブレヒトと日本/中国-叙事詩的演劇への道」『Arts and Media』Vol.1, 大阪大学文学研究科、査読有、2011年3月、pp.8-27

Yasushi Nagata, "Two Benefits of Liberalization: A Cross Section of the Korean Diaspora Theatre in Russia and Japan," *The Local meets the Global in Performance*, Eds. Pirkko Koski and Melissa Sihra, Cambridge, 査読有、2010, pp.129-144

Mitsuya Mori, "Women's Issues and a New Art of Acting: A Doll's House in Japan," *Global Ibsen: Performing Multiple Modernities*, Ed. Erika Fischer-Lichte and others, Routledge, 査読有、2010, pp.75-88

毛利三彌、「演劇の物語論覚え書-戯曲と上演」『演劇学論集』日本演劇学会紀要、50号、査読有、2010年、pp.19-38

〔学会発表〕(計 18 件)

Masae Suzuki, "The Duality of Okinawa Theatre: Facing China and Japan," *Chinoperl International Conference*, Philadelphia, PA USA, 2014, 27 March

Mitsuya Mori, "The Way to Shingeki: Three Stages of Theatre Modernization in Japan," *International Colloquium Modernization of Asian Theatre*, Asian Theatre Working Group IFTR, Osaka University, 2014, 15 March

Masae Suzuki, "The Fantasy plays of Otohime Gekidan and Unai," *Theatre Company "Unai" Lecture Demonstration*,

University of Hawaii in Manoa, Hawaii, USA, 2013, 25 October

Masae Suzuki, "Roots and Routes; the Transformation of Puck in Mainland and Okinawa," *IFTR Annual Conference*, National Institute of Theatre, Barcelona, Spain, 2013, 23 July

Yasushi Nagata, "Adapting Asia-Some Ventures of Kaoru Morimoto," *IFTR Annual Conference*, National Institute of Theatre, Barcelona, Spain, 2013, 22 July

Mitsuya Mori, "The Third Stage of Theatre Modernization in Japan: the Last Years of the Meiji Era," *IFTR Annual Conference*, National Institute of Theatre, Barcelona, Spain, 2013, 22 July

Yasushi Nagata, "Some Aspects of Meyerhold Impact on Japanese Modern Theatre," Asian Theatre Working Group, Central Academy of Drama, China, 2013, 16 March,

Mitsuya Mori, "How was the Theatre Modernized in Japan?," *Asian Theatre Working Group IFTR*, Guling Street Avant-Garde Theatre, Taipei, 2012, 8 January

永田靖、李応寿、張誠希、レベッカ・ジェニン、「アジアの中の日本と韓国-演劇研究の未来」日本演劇学会秋の研究集会「演劇の未来-日本と韓国」漢陽女子大学、2012年11月3日

永田靖「香港話劇団について」近現代演劇研究会10月例会、大阪大学、2012年10月13日

Mitsuya Mori, "Forerunners of the theatre modernization in Japan: Yoda Gakkai, Fukuchi Ochi and Okakura Tenshin," *Asian Theatre Working Group IFTR, IFTR Annual Conference*, Santiago, 2012 23 July

Yasushi Nagata, "An Initial Trans-cultural Lesson of Modern Nationality of Theatre: On the First Overseas Performance of Grand Kabuki to Soviet Union in 1928," *Asian Theatre Working Group IFTR, IFTR Annual Conference*, Santiago, 2012 23 July

Yasushi Nagata, "Rear-Garde Theatre in/from Japanese Context: Theatre Company Ishinha and its Performance," *International Symposium Where does theatre go after the Post Avant-Garde?*,

Korean Theatre Association, Korea National University of Arts, 2012, 20 October

瀬戸宏、「老舎《茶館》和滿族意識—從近三十老舎研究談起」『中国当代少数民族文学研究会成立三十周年式典第十一届學術年会』、西南民族大学、2011年11月11日

Mitsuya Mori, “Community and Theatre: Some Principal Considerations from a Japanese Perspective,” *Tradition, Innovation, Community, IFTR Annual Conference*, Osaka University, 9 August, 2011,

Mitsuya Mori, “Bilingual Inter-Asian Performance in Japan,” *Asian Theatre Working Group IFTR, IFTR Annual Conference*, Ludwig-Maximilians-Universität München, Munich, Germany, 2010, 26 July

Yasushi Nagata, Two Anti-Japan Songs: Inter-Asian Theatre Research Japanese View Point, *Asian Theatre Working Group IFTR, IFTR Annual Conference*, Ludwig-Maximilians-Universität München, Munich, Germany, 2010, 26 July

瀬戸宏、「日本新派『不如帰』受容の中朝比較試論」近現代演劇研究会10月例会、近現代演劇研究会、大阪大学、2010年10月23日

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永田靖 (Nagata Yasushi)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：80269969

(2) 研究分担者

毛利三彌 (Mori Mitsuya)
成城大学・その他・名誉教授
研究者番号：10054503

瀬戸宏 (Seto Hiroshi)
摂南大学・外国語学部・教授
研究者番号：80107864

市川明 (Ichikawa Akira)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：00151465

鈴木雅恵 (Suzuki Masae)
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号：70268291

(3) 連携研究者

()

研究者番号：